

「立ち上がる農山漁村」有識者会議（第2回）議事録

林座長 ただいまから、平成18年度第2回「『立ち上がる農山漁村』有識者会議」開催いたします。

本日は、お忙しい中、安倍総理に御出席いただいております。総理には、前回は官房長官として御出席いただいております。全国の農山漁村の活動に深い御理解をいただいておりますことに御礼申し上げます。

それでは、安倍総理からごあいさつをいただきます。

内閣総理大臣 今日は「立ち上がる農山漁村」有識者会議に大変お忙しい中、皆様にこうして御出席いただきましたことに御礼を申し上げる次第であります。

私は、美しい日本をつくっていく、このように申し上げているわけではありますが、日本の農山漁村は、美しい日本の原点ではないかと思えます。まさに日本の田園風景が農山漁村にはあるわけでありまして、この農山漁村の美しさ、よさを是非とも守っていかねばならない。それと同時に、農山漁村が生き生きと未来を見つめていくことができるようにしなければいけない。そういう農山漁村であって、初めて景気も活性化していくし、美しい日本につながっていくのではないかと、このように考えているわけであります。

農林水産業が新世紀にふさわしい戦略産業となる可能性を秘めているわけでありまして、とりわけ「立ち上がる農山漁村」に選ばれる事例を拝見いたしますと、美しい国の礎になり得る、素晴らしい取組が全国各地で起こっているというふうに思えます。額に汗して働き、自分の暮らす地域や故郷をよくしたいと願う人々に報いるためにも、今後とも「立ち上がる農山漁村」を積極的に支援していきたいと思えます。

また、有識者の皆様方にも積極的に御議論をいただき、また、いろいろなアイデアを出していただきたいと思いますので、どうぞ、よろしく願いいたします。

林座長 ありがとうございます。本日は、有識者委員が「立ち上がる農山漁村」の選定事例として推薦しております事例の代表者にお越しいただいております。

テーブルには、各事例の産品がございます。是非、お召し上がりいただきながら、この会議を進めてまいりたいと思えます。

では、4人の代表者から事例紹介をお願いいたします。恐れ入りますが、時間が限られておりますので、資料2により、お一人2分程度でお願いいたします。

まず、埼玉県宮代町の榊原一雄町長、お願いいたします。

榊原町長 御紹介をいただきました、埼玉県宮代町の町長の榊原でございます。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

私どもの町は、埼玉県の東北部に位置しておりまして、都心から約40キロ、東武伊勢崎線で1時間ほどのところにあります。駅から歩いて5～6分足らずで、田園風景が広がる人口3万4,000、小さい町でございます。宮代町は、高度経済成長期に首都圏にありながら都市化の波の中で、やや取り残されたと言われてきました。

しかし、それが今になって幸いして、開発の波から生き残った農地、農村がひっそりと息づく、言わば都市近郊の中での小さなオアシスとして、その存在感を高めていると、そのように考えております。

また、平成7年に町の中期計画を立てるために行った住民意識調査では、町民の8割が住みよい、そして住み続けたいとし、町の特徴は田園風景、今後のまちづくりの目標は田園風景の残る環境に恵まれた町を挙げた人が非常に多く見られました。

このことは、町で生まれ育った人ばかりではなく、移り住んだ人も、また働き学ぶ人にも故郷になり得る町として認識されている証ではないかと考えたところでございます。

ならば、まちづくりにおいても人口が少ない、デパートがないなど、ないない思考に陥らずに、歴史的にも風土的にも農村であったという原点に立ち返って、先人から受け継いできた田畑や屋敷林といった農のある環境を町の個性と資源ととらえて、ときにはこれを修復して、美しさと品格を与え、だれにとっても共感、共有、共鳴できる暮らしの空間として、美しい風景の町、宮代をつくり出すことによって、一点突破、全面展開の明日が見えてくるのではないかと。また、それによって、環境、福祉教育、産業、防災など、生活の基本が確立できるのではないかと、そういうことでまちづくりを進めようというのが農のあるまちづくりの始まりでありました。

お手元にパンフレットをお配りさせていただきましたが、その農のあるまちづくりの象徴であり、引き受け手となっているのが、新しい村でございます。新しい村の建設理念と申しますか、考え方は、今ある景観をできるだけ変えない、そういう方針で整備をいたしました。水路も土水路、道も土系舗装、また、直売所も地元で生産された農産物や、それを使った加工品に限る。そうした徹底した地産地消を目指すということを基本といたしております。また、新しい村の役割でございますが、繰り返しになりますが、宮代の現風景を保全すること。食を通して命の尊さを学ぶこと。そして大地を守っていく、その3本柱に据えております。

林座長 ありがとうございます。よろしいでしょうか。

それでは、続きまして、農事組合法人雪太郎の郷の佐藤健一代表理事、お願いいたします。

佐藤代表理事 新潟県上越市牧区の方からまいりました農事組合法人の代表をしております佐藤健一でございます。

私ども上越市は、平成17年1月1日で14市町村が合併をし、そして大きな市となりました。

そうした中で、私どもは高田、直江津駅から約30分余り南に上がったところ、長野県境の飯山市との県境にある地域でございます。

そういう土地柄でございますが、昨年は3メートル以上の雪が積もっておった所でございますが、今年はお陰様で、現在、50～60センチで非常に過ごしやすい冬を迎えているという状況でございます。

そうした中で、私ども、昭和 63 年に任意の生産組合を立ち上げまして、農地の荒廃、そしてまた耕作放棄あるいは不在者地主の農地を活用して緑を保っていこうと、ひいては、農地の災害もそれによって防げるだろうと、そういう思いで組織を立ち上げ、さらには、小規模農家の皆さん方の集まりの集落でございますので、大型機械を導入することはなかなか容易でない、そういう中で、機械の共同利用を図っていこうということです。

また、現在も進行中である転作に対してのものもクリアーしていく。そういう部分を立ち上げ、さらには、女性の余暇の時間を、生産組合の中の生産の部分に当てていただくかというふうな思いで、この組織を立ち上げました。

そして、実際に立ち上げまして、当初は狭い面積でございましたが、現在は水稻が 1.5 ヘクタール、他は大体転作を含めた、今、ここにございます雪太郎大根の生産を中心として、女性を筆頭にしまして、そしてこの活動をしています。大根にすごくこだわっていこうじゃないかということで、皆さんが大根に寄せる思いをいろいろ語り明かしまして、1 年経過し、そしてその 1 年後に 3 年ほどかけまして、実は、全国でも初だと思っております、大根ジャムを商品とすることができました。

現在では、いろんな切り干しとか、いろんな加工品を皆さん方の冬季の仕事として、そしてまた皆さんに頑張ってもらっています。

御案内のように、山間地は非常に高齢者が多く、そして女性が年をとられて、なかなか動く人がいない、若い皆さんも減少している。私は、そういう中で組織とともに農業体験を受け入れながら、あるいはこれから発生してくる団塊の世代の皆さん、あるいは若い田舎暮らしをしてみたい皆さん方の受け入れを現在も進めております。

年間に約 100 人から 200 人くらいの受け入れをさせていただいておりますが、東京農大の学生さんも私は受け入れさせていただいておりますし、国際 JICA あるいは役職の皆さん方もお招きをして、実態を見ていただいて、そしてまた、地元の女性にも紹介をし、皆様からお話をいただきながら、また皆さん方にも、これをバネに、よりよい自分たちの生活基盤を築いていこうと、日夜皆さんと一緒に頑張っているところでございます。

そうした中で、いろいろ特産品を進めていく、ただ、雪が非常に難であるのですが、雪こそ我が宝と思い、私らはそこで精一杯、冬の答えを、雪解けとともに感じる春は、我が雪国ならではの実感でございます。そうした思いを常に胸に抱きながら、女性を中心として動いているという状況でございます。よろしく願いいたします。

林座長 ありがとうございます。続きまして、株式会社ふるさと海土の山内道雄代表取締役、お願いいたします。

山内代表取締役 御紹介いただきました山内でございます。株式会社ふるさと海土の社長であり、同時に、海土町長を兼ねております。

そういうことで、今日は日本海に浮かぶ小さな隠岐諸島の中の 1 つの島からやってまいりました。私はやはり島が生きる道というのは、第 1 次産業の再生しかないという思いで、海のもの、山のものというふうなことで、第 3 セクターを立ち上げたところでございま

す。

そういう中で、これまで2年が経ちましたけれども、今一番感じていることは、地域資源に対する目覚めといいますか、これは生産者であり、同時に地域の住民も、今まで本当に我々が忘れていたといいますか、そこに今、思いが一致していること、それが大変よかったなと思っております。そういう面では大変生産意欲も出てきておりますし、また、地元の住民もだんだんそちらに移行しています。

そういうことで、生産者の所得にもつながっていますし、また、担い手の育成にもつながっています。現実に、今までIターンの方が138人まいりました。今、2,500人の人口の中で72世帯、しかもこれは団塊の世代ではなくて、40代以下の皆さんが来て、今、大きな島の力になっていただいております。その中には農業を志した者あるいは肉用牛は最近東京市場で評価を受けていますけれども、そういうところへ向かいつつあります。このIターンの力というのは、私は非常に大きいと思っていますし、これを大事に、これからも再び島から去ることのないように、我々もフォローしながら頑張っていきたいと思っています。

そして、商品開発につきましては、Iターンの方の外から来た人の目というものが商品開発に役立っています。研修生制度は私のところが取ってからもう10年近くなりますけれども、3セクのレストランで出ているメニューは、研修生の方、あるいはIターンで来られた方が、今、従事してまして、その方たちの創意と工夫で商品開発につながっております。今、「さざえカレー」もショップ店ではヒットしておりますし、もう10年になりますけれども、本当に愛されているところでございます。

いずれにしても、今、地域がみんなで立ち上げていこうと、本当にこれだけ厳しい世の中で、地域はそれぞれ頑張らないと島は沈没するんだということで、今、コミュニティの力といいますか、そこが非常に頑張ってくれています。職員も給与カット30%で頑張っていますが、職員の頑張りとは、それから地域の理解、そしてまたIターン者の3つの力によって小さい島ながら、とにかく日本を変えていこうという思いで、今、頑張っているところでございます。大変大きなことを言いました。

林座長 ありがとうございます。このおにぎりもそうですね。

山内代表取締役 そうです。

林座長 それでは、最後になりましたが、NPO法人学生耕隊の近藤紀子代表、お願いいたします。

近藤理事長 山口県生まれの山口県育ちで、今日は参りました。

山口県と農業が大好きで、そのまま山口大学にも進学しまして、大学3年生の学生のときにアンケートを行いました。山大の1年生全員、2,000名を対象に1,370名から回収しまして67%、3人に2人の学生が農業に関心があるというデータが出たわけです。

それをもちまして、山口大学の先生方にも御協力をいただきながら学生耕作隊が立ち上がりました。こちら山口大学初の農業ベンチャーとして立ち上がったわけですが、それが

ら後輩たちや、いろいろな地域の方たちと一緒に事業が広がってまいりまして、また、学生だけでなく、シニアの方たちや食育に関心のある主婦の方たちも巻き込んでまいりまして、延べで6,000人の方たちが援農に参加をしていただいております。

そういう事業を続けておりますうちに、地域の困っているお年寄りの方たちから相談が入るようになりまして、後継創業という形で事業を引き受けることが出てまいりました。パン屋ですとか、食堂ですとか、本日、こちらに「もったいないナシパン」というのを持ってきておりますけれども、山口県秋芳町の永嶺農園のナシを使って、規格外の市場に出せない、カメムシに吸われてへこんでしまったナシとか、たくさんあるんです。そういったものを使って、これも私たちの同期の仲間が去年の1月からパン屋を引き継いで経営しているんですけれども、そこでつくった「もったいないナシパン」になっておりますが、また、地域の事業だけでなく、指定管理者としても事業が広がってまいりまして、グループとして1億数千万円の売上につながっております。

事業は島根県にも広がりを見せておりまして、島根大学の学生さんとも一緒に学生耕作隊が立ち上がってまいりました。また、本当に地方は困っているということで、中国新聞さんなんか、今年の1月1日から『村は問う』ということで連載を始めていらっしゃいますけれども、本当に高齢化、担い手不足、文化の喪失、農地の崩壊、そういったことで本当に地方は困っている。困っているからこそ、だれかに頼っている場合ではないと、自分たちで何とかしようということで、私たちも事業を進めております。

これからの最大の課題は、兼業農家が担ってきた、農業の農村コミュニティー、これをいかに守っていくか、その一環として中国四国農政局と農村コミュニティー再生・活性化支援事業というのも2分の1ずつの予算負担でやっておりますけれども、本当に自給ができずに国の安定はないと思っています。農林業なくして美しい日本、美しい農林業、そういったものは美しい日本というのはつくれないと思っております。

今、時代は転換点に来ているからこそ、農から始まるコミュニティーづくりを進めていきたいと思っていますし、それにつながる農産官学連携の事業、また、せっかくですので「立ち上がれ農山漁村！」ということで全国キャラバンなんかもやっていきたいと考えております。

以上、報告を終わります。

林座長 どうもありがとうございました。

総理、いかがでしょうか。今、紹介いただきました事例につきまして、何か御感想がございましたらお願いします。

内閣総理大臣 お話を伺っていると、何となく勇気づけられたような気持ちになってきます。希望がわいてきます。

最初の埼玉県の宮代町の榊原町長さんから、やはり農村の風景というのは、極めて魅力的なんだと、その認識が大切なのかなと思いました。

今、メイド・イン・宮代マップというのを見せていただきましたけれども、このように

自分のところの産品をわかりやすく発信をしていくというのが大切なんだろうと思いますし、こういうものをつくっていくことによって、みんなが自信を持ってくるのかなという気がします。これは、本当に私はすばらしい試みだと思いました。

農産物の場合は、今までいわゆる営業的センスに欠けていたところがあったのではないかと思います、大変参考になりました。

また、上越市の佐藤さんのお話ありがとうございましたけれども、大根にこだわる、このこだわりが大切なんだと思いました。やはりこだわらなければ、なかなか大根からジャムをつくるという発想というのは起こらないのかなと思います。まだ、大根ジャムを食べたことはないんですが、三國さんも使っていただければいいのかなと思います。

また、田舎生活を体験したいという人をどんどん受け入れる、今、オーライ！ニッポンを進めています、都市と農村の交流を進めていく上においても、そのように、地域のよさを発信して、その田舎生活、農村生活を体験することは本当に人生にとって有意義なひとときなんだということを、是非、広めていただきたいと思います。

また、海士町の山内町長さんからお話を伺いましたが、138人のIターンが島にやってきたということは、私はすばらしいことだと思います。なかなか島に行くというのは、それなりの決心も要るんだろうと思いますが、それだけ魅力的なんだろうと、このように思いました。

また、外から来た人の目が役に立つ。これは本当に私もそのとおりだと思います。しかし、なかなかそのことに気づかずに、何となく自分たちは自分たちの地域のよさを一番よく知っているから、こういうところはいいところなんだから絶対に来てもらえるんだという一人よがりになる危険性というのが、私の地元にもそういうところがあるんですが、外から来ると、こういうところがいいんだと、これをもっと外に発信していけばいいんだというアドバイスを受けると、本当に観光客や何かの数や売店で売れるものも大きな変化が出てくるということとはよくあることなんだろうと思います。島で生活をしながらそういう視点を持っておられるというのは、私はすばらしいことだろうと思いますし、私の地元ではウニの中にサザエを入れています、「さざえカレー」というのは、なかなか発想としては面白く、島では常識と書いてありますから、是非試してみたいと思います。

また、山口県の近藤さんの話を聞いておりますと、同じ山口県人として、私も山口が大好きですから、大変勇気づけられるわけでありまして、農業に関心のある人が山大で3分の2、これは本当に高い数字だと思います。そこに着目して、農業を支援をしていく組織をつくった。NPOの役割を最大限活用していただいているなど、そういう組織があって、農業も生き生きとしてくるんだろうと思いました。

また、農家によっては、全国発信している農家はたくさんありますから、そういう農家を良い事例として、他の農家に示していくことが大切なんだろうと思います。

さっき例として挙げられた永嶺農園というのは、ナシでは千疋屋とか、ああいうところに出ている、私の地元だからよくわかっているんですが、最も有名な農家ですが、そうい

う農家の知恵や工夫を他の農家にも広げていくことも大切なのかなと思います。

それと同時に、農家と学生あるいはNPOの人たちが一緒になって、町や村をつくっていく、素晴らしい農産品をつくっていく、本当にこれは試みとしては、先駆的な試みですけども、これは全国に広げていくべきではないかと思いました。

林座長 ありがとうございます。大変勇気づけられる御発言をいただきまして、御礼申し上げます。

続いて、農林水産大臣から、今後の「立ち上がる農山漁村」の進め方について御提案があるというふうにお伺いしておりますが、よろしければ、一言お願いいたします。

農林水産大臣 本日は、御多忙中、御参集、御出席いただき、ありがとうございます。また、4事例の代表者の方々におかれましては、素晴らしいお話をありがとうございました。

ただいま伺いました各事例の地域を元気にする意欲あふれた取組には大いに感銘を受けたところでございますし、総理からも、その思いが、今、伝えられたところでございます。「立ち上がる農山漁村」につきましては、本日、選定の50事例を加えますと、合計で100を超える事例数となります。これらの事例を全国に広く発信、奨励していくため、前回の有識者会議への御意見も踏まえまして、選定事例の代表者が一堂に集まるサミットを開催して、「立ち上がる農山漁村」の取組を一層盛り上げていこうと考えております。皆様の御了解が得られましたら、具体案を検討させ、そして進めたいと思いますので、よろしくお願い申し上げたいと思います。

林座長 ありがとうございます。「立ち上がる農山漁村」サミットを開催してはどうかという御提案ですが、いかがでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

林座長 それでは、御了解いただいたということで、この後は事務局の方でよろしく御検討いただきたいと思います。

それでは、ここで総理と官房長官が御退席になられます。どうもありがとうございました。

内閣総理大臣 どうもありがとうございました。それでは、皆さん、頑張ってください。

(内閣総理大臣、内閣官房長官退室)

林座長 プレスの方も退席されますので、少々お待ちいただけますでしょうか。

(報道関係者退室)

林座長 随分、総理からいいコメントをいただきましたね。4事例について、きっちりした、素晴らしいコメントでしたね。

マクドナルド委員 あと、サミットというご提案もなかなかいいですね。

林座長 それでは、議事を進めさせていただきます。「立ち上がる農山漁村」につきましては、平成16年から、これで2年間かけて60の先駆的事例の選定、有識者委員による事例の現地視察も行ってまいりました。また、シンポジウムや政府広報を通じたPRなど

の活動を行ってまいりました。

昨年の9月には、当時官房長官でおられた安倍総理にも愛媛県の松前町へ現地視察をしていただきました。

本日は、平成18年度の事例選定を行います。公募の結果、全国から128の公募がありました。この後、各委員から選定のポイントについて説明していただき、選定事例を最終的に決定したいと思いますので、よろしくお願いします。

林座長 それでは、各委員からの選定事例の案につきましては、資料3をごらんいただきたいと思います。資料3は、どのような視点で事例を選定したのかというポイントを纏めたものですが、今日御出席の4名の委員の方々から順番に御発言いただきます。

また、前回の有識者会議で、皆様から御了解いただきましたとおり、今回が初めてですけれども、選定事例の取組に対して、独自の知見と技術で他の団体の模範となるような協力された企業あるいは大学等についても資料5のとおり新たに選定して、これを表彰したいと考えています。

それでは、最初にマクドナルド委員からお選びになった視点を簡単に御紹介いただければと思います。

マクドナルド委員 今日は海士町について、ちょっとお話してみたいと思っているんですけれども、今回は、本当にたくさんのすばらしい事例の中から選ぶのに大変悩みました。私はここ20年間弱、日本の農村漁村をいろいろ歩いて、フィールドワーカーとして研究してきましたけれども、日本人の方は、「日本は島国だから」とよく言われるんですが、島国でありながら島国の存在を忘れている本土があるような気がします。逆に、離島を回っていると、本当の島国の姿がそこにあったりします。離島という場所に生きる人たちは、かなり色々なハンディーキャップを背負って、本土と対等にやっけていこうとしながら活動しなければいけないですから。今回の事例を見ても、まず、掲げているキーワードからも、自立精神、挑戦または交流を大切にするというかなり健全な精神で生きていることが伝わってきます。孤立した存在になりがちですから、そうならないように、オープンにし合ったりしていくような感じで、活動自体はなかなか密度の濃いものです。それがほかの離島または漁村にとっても刺激になればいいのではないかと思います。ほかの例に関しても、たくさんの意見はあるんですけれども、ほかの委員の方も話をしなければいけないので、つたない日本語ですが、私の発言をこれで終わりにさせていただきます。

以上です。

林座長 ありがとうございます。続きまして、小泉委員からお願いします。

小泉委員 私は埼玉県宮代町について、ちょっと説明を申し上げます。やはり日本で、今、地方に行って、いろいろ気づくことは、原点を失っているというか、どんどん欧米化されて、生活も気がついてみたら、隣の八百屋のおばちゃんもいなくなったし、向かいの魚屋のおやじさんもいなくなってしまって、みんなスーパーマーケットに行ってもものを買っている。

こういうことでは、次の世代の若い人たちなんていうのは、この国を愛せないと思います。どこのだれが何をつくったのかわからないのを食っていて、そういうような状態ではない、やはり地産地消というのが非常に重要だと思います。

それから、農業の原点というのは、そういうところになぞっているのではないかと思うんです。ですから、人に近い都市型の町というものも、私はこれから首都に人口が集中する中であって、農業を体験させたり、教えたり、そういうことをする日本のよさを教えていくのには、やはり首都圏の町にこういうように農業と都市との交流の場というのが非常に重要になってくるのではないかと思います。そういう中で、いろいろな魅力ある製品をつくられたり、それから私はこれからは新しい時代の古き日本というものを今一度戻さないとだめになるのではないかと考えて、そういう意味で、一番首都圏に近い埼玉の町を、今、私は面白いなと思っております。

以上でございます。

林座長 ありがとうございます。長岡委員、いかがでしょうか。

長岡委員 私はテレビをつくる人間として取材に行きたいなと思うところを選ばせていただきました。つまり、目新しくてオリジナリティーがあって、そしてみんなにも知ってほしいと思うような、そういう取組です。特に他の地域でも応用可能なこと、それから刺激になるようなこと、こういう取組は大変すばらしいなと思いました。そういう意味もありまして、山口の学生耕作隊さんは、私も推させていただいたんですけども、先ほど近藤さんのお話を聞いていて、お若いのに本当にすばらしいなと感激しました。農山漁村という高齢の方の取組がこういう事例でも多くありますけれども、若い人もこんなに頑張っているというのをみなさんに知ってほしい、応援したいと思いました。また近藤さんのお話をうかがって、地域の人を始め周りの人をどんどん巻き込んでいく、次々新しいアイデアが出てくる、このまわりを巻き込んでいく力も非常にすばらしいなと思いました。頑張ってください。

近藤理事長 ありがとうございます。

林座長 ありがとうございます。三國委員、いかがでしょうか。

三國委員 私は、料理人で料理をつくる立場から、先ほど総理もおっしゃったんですけども、大根のジャムは良いですね。大根のジャムというのは日本人しか考えないです。これも日本ブランドに、発想ないですものね。すばらしいと思います。

私が選んだ基準は北海道なので、今、一番北海道が元気がないので、北海道は基本的に全部バックアップしたいと思います。

あと、全国回りますと、廃校がたくさん増えているんですね。その廃校を活かして事業による取組を選定し、支援していきたいと思います。

あと、農村が結構多いんですけども、漁村が少なかったんです。ですので、今回、2例、3例出ていますので、漁村は基本的にバックアップしていきたいと思います。

あと、つくったものを世界ブランドにしていく。アジアとか世界に売っていくという事

例がありましたので、是非これもバックアップしていきたいのと、総理がおられないんですけれども、アメリカのCIA（米国料理学院）が今年の秋に日本ブランドを全アメリカに発表したいということで、これは内閣官房にお願いして、正式に依頼は来ているんです。日本のこういう農水物をアメリカ中に発表したい。アメリカ中が注目しています。

あと、料理人のオリンピックというのが2008年に開催されるんです。それがドイツで、初めてユースといいますか、23歳以下の、その団長に私になりまして、日本の23歳以下の和洋中の料理人を付けて、4年に一度なんですけれども、そこで日本の技術といいますか、そういう産物を使った料理を世界に発表していきたいと思います。

こういうブランドを日本だけにとどまらず、海外やアジアに、まず持っていくというのは大切なことだと思います。

あと、日本古来のものを守っていく、これはスローフードの原点なんですけれども、さっき小泉先生もおっしゃったように、こういう伝統的なものを我々が守っていくというのは、大切な農山漁村の役割ではないかと思って選定いたしました。

林座長 ありがとうございます。今、4名の出席されている委員からコメントをいただきましたけれども、残念ながら、今日は参加されなくて欠席されている委員のコメントをちょっとだけ御紹介させていただきたいと思います。

まず、今村委員は6件選ばれておられるわけなんですけれども、環境教育のリーダーを養成している、青森県の鱒ヶ沢町、ここのNPO法人の白神自然学校一ツ森校というもの、これは廃校を利用しているかどうかわかりませんが、そういう活動に大変感心したというお話であります。

それから、白石委員は10の事例を選ばれておりますけれども、どこもすばらしいコメントをいただいています。例えば岩手県の二戸市の「つぶっこまんま」というところが食文化の伝承、食育、それから地産地消レストランの運営といったようなことをやっていて、これは大変立派だということで選ばれたということでもあります。

永島委員は青空市場をやっていらっしゃるけれども、この方も10件がっちり推薦してきておられます。やはり、地域の力をどう生かしているかということで、例えば離島、過疎、高齢を乗り切る活動を進めておられる今日ご出席の山内町長さんのところ。また新潟県の佐渡市の南佐渡海洋公園管理組合、ここも同じような問題を抱えておられるわけなんですけれども、そこで地元の漁民の方々が力を合わせてということを大変評価して選んでおられます。

最後になりますが、丹羽委員も長文のコメントとともに10件選んでおられまして、例えば今日ご出席の海士を選んでおられますね。離島の活性化のモデルケースになるとおっしゃっていますので、これは是非頑張ってくださいと思います。

私も選ばせていただきました。これまで北海道は沢山認定されてきましたが、今回は沖縄も2例「やんばる自然塾」というのと「今帰仁アグー」が選ばれています。南西諸島にはシマブタというのがどこでもいたんですが、それがいなくなって、それをアグーという

沖縄の在来豚、これを一生懸命育てておられて大変立派なことではないかなというふうに思います。

このように欠席の委員も含めてコメントを御紹介させていただきました。

それでは、これで大体皆さんのお話はいただいたものですから、先ほど事例紹介をいただき、なおかつ委員の方々のコメントもいただきましたものですから、ここで自由に御発言いただきたいと思います。いかがでしょうか。何か言い残したことはございませんか。

佐藤さん、どうぞ。

佐藤代表理事 私どもも、先ほどもお話ししましたがけれども、非常に高齢化の中で、現在、実はそういう故郷回帰ということで、定住あるいは2地域居住、そうしたものも想定しながら、地元あるいは地域の人をこれ以上減らしたくない、こういうような思いでやっておりますし、せっかくこうして構造改革特区の下に、特区でいろいろさせていただけることができたということで、私も民宿をやりながらどぶろくをやらせていただいておりますけれども、こうして地域に都会の皆さんが入り込んでいただくことが、地域にとっては非常に元気になる情報を得る場所でもあるということから、一層都会の皆さんとの交流を図ってまいりたいというふうに考えております。

そして、また、地元の女性たちにも、さらには、元気を分け与えながら、女性がいなければ、田舎は特にそうなんです、パワーが生まれてきませんので、女性にそうした力を注ぎたいと考えております。

林座長 ありがとうございます。

アンさん、どうぞ。

マクドナルド委員 山口県の事例について付け加えさせていただけるなら、私は、やはり果樹園のように多くの労働力を必要とする農業は、今後、労働問題がかなり深刻になっていくと個人的に考えています。そういった意味では、6,000人も的人员を集めて、新しい仕組みでやっているのは素晴らしいと思います。私も果樹園で農業ごっこをしたことがあるんですけども、かなり大変な作業でした。

果樹園とか畑作の現場において、今後、労働力をどうしていくのか。高齢化していく中で、若者とか、山口県の事例のような形というのはもちろん良いと思いますが、私が深刻な問題だと思うのは、研修生という名目で外国人を受け入れて、現場で労働力として使ったりしていることです。在日外国人の一人として、私がここで言うのは、余りよくないのかもしれないんですけども、農業現場で、今後、外国人をどう使うか、それとも使わないかということ、やはり表に出して大いに議論していく必要があるのではないかと思います。これは農業現場だけではなくて、漁業についても言えることですが、やはり研修生を名乗る外国人の労働者は、現在、増えていますから、今後、この問題を考えていく上で、今回のモデルは一つの材料にもなるのではないかと思います。

あと、今回、栃木県的那須塩原市のように、バイオマスなど自然環境に配慮し、しっかりとした研究に基づいた土地改良区の新たな事例がありましたが、そこで都市住民との交

流などが提案されていまして。そのように、現在その地域にいる人たちを元気づけていくものだけではなくて、プロ意識を持って、グローバルレベルで戦える新しい農業の技術を開発していく中で大いに参考になる事例が出てきていて、すごくいいなと思いました。

以上です。

林座長 ありがとうございます。資料3には選定案の一覧表がございますので、これを見ていただくと、実は128というのは去年と同じ応募数だったんです。

ところが、内容が今年は去年に比べてものすごく高くなっている。ですから、委員の方々は選ぶのに大変苦労されたのではないかという気がします。

恐らく潜在的には、もっとたくさん優良事例が全国的にはあるのではないかと。ここはどうしても熱心な県とそうでない県というの言い方がおかしいんですが、そういうのもございまして、すごくたくさんいいものを出してこられる県と、そうではない県がある。たまたま見ますと、去年全くなかった熊本県は今年4例あるんです。

これは、松岡大臣が大臣になられたからということでは全くありませんで、これは私たち委員が一人ひとり選んだら、結局この4つが出てきたということで、これも先ほどアン委員がおっしゃったように、例えば農業を志す人を育成、自立させるというようなプログラムであるとか、ツーリズムであるとか、一つひとつお話ししますと時間が足りなくなってしまいます。今年選ばれなかったところは、また来年是非とも御応募いただいて、数が幾つになってもこれはいいかなというふうに私は思います。何しろまだまだ出していきたい県がありますので、来年も引き続いてやらせていただければと思います。今年はたくさんの優秀事例が出てきたというふうに、私は座長として思いました。

ほかに何か御意見はございますか。

三國さん、どうぞ。

三國委員 今おっしゃったように、まだ皆さんに告知といいますが、「立ち上がる農山漁村」が広まっていないわけで、これが本当にサミットみたいのをやっていただいて、もっとアピールしていただくと、そういうことをやっているんだとわかるじゃないですか。みんなに評価をしてほしいので、是非サミットというのを成功させて、もっと広く公募しているということを知らせるということが重要だと思います。

林座長 先ほど大臣から御提案いただきましたけれども、これは事務局の方をお願いしたいと思っていますのは、選定証を差し上げる日時とサミットを別にしますと2回来ていただかなければいけないですね。しかしサミットは準備が必要ですから、多少時間をとらなければいけない。一緒にしてしまうと、選定証を差し上げるのが遅れます。選定証だけ先に差し上げてサミットは後にするという案、それと選定証授与とサミットを同時に行うという案の両案を事務局の方で検討していただきたいと思うんですが、それでよろしいですか。

農林水産大臣 はい。それでよろしいです。または、その結果お決めいただければと思います。

林座長 そこは、事務局の方では是非とも御検討いただきたいと思っています。

2 回来ていただいた方がいいんですが、やはり皆さんお忙しいでしょうから、けれども、選定証を差し上げるのが余り遅くなりますと、どうかと思いますのでね。

ありがとうございました。それでは、この意見交換を踏まえまして、各委員に御選定いただいた資料3にお示しした一覧表の1～50まで、この50事例を「立ち上がる農山漁村」として選定すること。またもう一つは、最初に申し上げました8団体、これは立ち上がる農山漁村プログラムの各事例を支えてくださっている、または応援してくださっている企業あるいは大学です。資料5をごらんいただきたいと思います。

この8団体については、「立ち上がる農山漁村～新たな力～」というタイトルになりますが、これら2種類の事例を、当有識者会議において選定してよろしいでしょうか。

(「はい」と声あり)

林座長 ありがとうございました。それでは、資料3の50事例、資料5の8団体、これを選定いたします。

また、今後の選定証授与式、サミットにつきましては、三國委員からもお話がありましたように、非常に重要な、今年からの新しい試みになりますので、是非事務局の方で検討していただきたいと思います。

何か最後に言い残されたこととかありますか。

どうぞ。

マクドナルド委員 また個人的な意見で大変恐縮なんですけど、今度のサミットでは是非林業と漁業の例も一緒にお願いたいたいです。やはりどうしても農業の事例が多くて農業が中心になってしまうので、できれば今までと違って、漁業の例からスタートして次に林業へ行って、少し農村があってもいいんですけども、やはり漁業と林業の事例を大いに出していただけたら非常にいいなと思います。

林座長 そうですね。日本の美しい自然というのは、山から農地を通過して海までというふうに河川で見てもつながっていますから、そのつながりがよくわかるようなことも検討していただければと思います。

農林水産大臣 今、おっしゃった点でいいますと、例えば長崎県の松浦市、これはアジとサバの養殖で町を興しました。今、中国にアジとサバを輸出しだして、去年と今年とを比べますと、5倍以上の売上になっているんです。約5倍か6倍、急激に伸びている。そして、中国にアジとサバを持って行って料理をして、三國さんがおられますが、中華料理はぶつ切りだそうですね。ところが日本は3枚に下ろす。ですから、向こうの奥さんたちも本当に一生懸命見ていて、包丁も一緒に売ってくれというので、包丁も売れる、そんなわけでアジとサバで町起こしという事例もありまして、山の方も同じようなことで、いろんな事例がありますから、いい御提案をいただいたと思います。

三國委員 小泉さん、海の事例というのは出てこないですね。何かあるんですか。

小泉委員 そうですね、どうしてですかね。

山内代表取締役 今、魚の状況が厳しい状況にあります。9月までシロイカが取れなくて、本当に悪戦苦闘しました。

東京の大手の外食産業とも、今、やっておりますけれども、それをつなぐのが大変でございました。海は、今、非常に厳しい。農業も厳しいですけれども、海はより厳しいですね。

三國委員 だとしたら、漁業の方に何かキーワードをつくってあげて、ハンデを持たせてなされると、もっといっぱい事例が来るかもしれないですね。今、べたっと海と言っているの、なかなか今おっしゃったように、取れないといけないみたいな、そういうことを考えれば、もっと増えるのではないですかね。

林座長 ここは来年応募数を増やしていただくためにも、事務局と一緒に一工夫考えてみたいと思います。

小泉委員 今、大臣がお話しされたように、長崎県のあれもそうですけれども、ああいうところは、この2～3年で非常に増えましたね。大分県の佐伯向こうですか、ここはクジラで大変なことになってきていましたね。

そういうところだから、今、三國委員が言ったように、ある程度こちらからもっとする。そういう意味では、今度のサミットもそういうところに積極的に広報することは非常にいいことだと思います。

農林水産大臣 厳しいですけれども、これは今、大きな変化のときだと思います。攻めの農政というのを打ち出したのは、実はそういうことがありました。どうしても外国は大きくて強いから、小さくて弱い日本の農業は守らなければいけない。私も農林族、農林族と言われて、悪い代名詞みたいな形でやってきたんですけれども、ところが、どうも状況が違う。守っていたのでは守り切れない。やはり攻めていくことで初めてね、幾ら鉄壁な守りをして、稲尾投手が0点に押さえても1点を取らないと勝てないわけですからね。

ですから、私は今日、これから中国に行くんですが、いよいよ米の輸出の実現を目指して行くんですけれども、魚も恐らく下手をすればイワシが超高級魚になるような時代もそう遠くないかもしれない。

今、ものすごく需給構造が変化していますから、これをどう生かすか、それをどうつかむかといったことかと思っています。木材もそうです。ものすごい中国の需要がありますから、それだけの需要の国が隣りにしっかりある。これをどう生かすか。

ですから、まさに漁業も林業も農業は勿論ですが、変化をどうとらえるか、そういう目で我々もしっかり取り組もうと思っています。

ただ、今日は事務局が農村振興局なものですから、水産庁と林野庁がまだ直接来ていないので、そこも連携をしっかり取ってやります。

林座長 そういうふうには是非お願いしたいと思います。

それでは、皆さんから大変貴重な論議をいただきました。今後は、これらの意見を踏まえて農山漁村の活性化のために「立ち上がる農山漁村」活動を全国に普及させるというふ

うにしていきたいと思います。

また、政府関係者、有識者会議委員の方々、それぞれの立場で御支援いただきたいと思っています。

具体的には、本日、御出席していただきました安倍総理、それから塩崎官房長官、松岡農林水産大臣を始め、多くの方々を選定された事例の現地へ行っていただきたいと思っています。私たち委員も可能な限り現地の方に出向いて直接激励させていただくというふうを考えております。これは、有識者会議委員の全体の希望ですので、代表してお願い申し上げます。

農林水産大臣 わかりました。

林座長 それでは、本日はここで閉会とさせていただきたいと思っています。この後、私の方から記者会見を行うこととしておりますので、御了承いただきたいと思っています。

本日は、御多忙のところありがとうございました。